

【書評】  
橋本裕之『震災と芸能——地域再生の原動力』2015,追手門学院大学出版会.

評者 庄子 諒

よく知らない誰かの「助けて下さい」という呼びかけの声に、ひとは脊髄反射的に動きだすことができるだろうか。少なくとも私は、いろいろなことを考えてから判断しようとしてしまう気がする。私に助けられるだろうか。私でいいのだろうか。……そのようにためらっているうちに、自分よりも早く動きだしたほかの誰かが、助けを求めるその人に駆け寄り、手を差し伸べてくれるかもしれない。そのとき、私はふたつのことに安堵するように思う。ひとつは、助けてくれる人が現れてよかった、ということ。もうひとつは、この事態に自分が関わらずに済んでよかった、ということだ。自分がこの事態の責任の一端を背負ってしまうかもしれないことを、言い換えれば、当事者になってしまうことを、怖いと感じるのだろう。しかし、困難を抱える誰かを助けること、たとえば被災地における支援とは、そのためらいや怖さの壁を越えた先にあることを、本書は強く訴えかける。

東日本大震災後、著者は、岩手県沿岸部を中心として、被災した民俗芸能団体に対して、活動の再開、存続のための支援を行ってきた。具体的には、失った物品や練習場所、倉庫などを確保する資金の助成の段階から、祭りや公演の場の再生や創出、さらには民俗芸能を通しての地域の復興を見据えたさまざまな取り組みなど、重層的かつ継続的な支援に携わっている。本書にならぶ支援の報告の数々は、刻々と変化する被災地の状況をそのままに映し出す、そのつどの「現在進行形」のレポートとして綴られているからこそ、被災地における祭りや芸能の動向をわれわれに追体験させるようなリアリティがある。だが、本書が持つ説得力は、そうした報告の内容自体の豊潤さによるものだけではない。

著者は、盛岡大学で教鞭をとっていた2011年5月、講義のなかで、陸前高田市のうごく七夕まつりに参加してきた団体で活動している学生から、「助けて下さい」という切迫したメッセージが書かれた出席カードを受け取る。その言葉をきっかけにして、著者は、被災地の民俗芸能の支援へと動きだしていった。この出席カードの衝撃は、たんなる助けを求める叫びではないところにある。つまり、「誰か」助けて下さいではなく、ほかでもない著者その人に対しての「あなたが助けてくれる人になって下さい」という「呼びかけ」なのである。この出席カードは、届けられたその瞬間に著者を、たとえ助けてくれる人になったとしてもならなかったとしても、そしてその祭りが存続したとしてもしなかったとしても、有無を言わず、その行く末に関わった当事者へと仕立て上げてしまったのだ。この事態の当事者として著者を主体化させる契機となった学生の言葉は、情報不足と自粛ムードのなかで「まったくといっていいくらい動けなかった」(p.62)という著者を、脊髄反射的に動かし、「当初躊躇したことがまちがっていたという実感」(p.64)へと誘った。やがて著者は、自身のFacebookに「みなさん、頼みます。手を貸してください」「どうかお願いします」(p.171)と、さらなる支援への協力を求める文章を投稿する。SNSを通して発信された著者の切迫したメッセージは、学生が出席カードに書きつけたような、当事者の「助けて下さい」の言葉そのものである。

本書のタイトルに掲げられているように、著者は、地域再生の原動力としての民俗芸能

の可能性と必要性を、実感を持って繰り返し強調する。そのうえで、祭りや芸能を続けた人々に対して、いかにその場を再生し、いかに支援をつないで広げていくか、という課題が示されていく。本書の問題提起は、地域経済やコミュニティの再生など、地域社会の普遍的な問題を背景に持つ、被災地の現場に根ざした極めて実際的なものであり、その生々しさや苦悩は、現地の人々と深い関わりを築き、いわば地域のステークホルダーのひとりにならなければ描きえない手触りである。したがって、本書で示される課題にも、著者の訴えにも、支援に積極的に取り組まない研究者に対する苛立ちの表明にも、現場のリアルティ側に立ったからこそその説得力、正当性、いわば「強さ」が宿っているのだ。

ところで、本書に収載されている、著者が登壇したシンポジウムの質疑応答のなかで「ここで紹介されている民俗芸能団体は少し恵まれているところかもしれない」という趣旨のコメントが寄せられる場面があった。著者が関わってきた芸能団体の被害状況は多様であり、そのコメントは一概には受け入れがたい。しかし、私は決定的に、本書で取り上げられている芸能団体が恵まれていると感じるところがある。それは、著者である橋本裕之と出会うことができた、という点である。先述した出席カードの件では、その芸能団体に所属している学生がたまたま著者の講義を受講していたという偶然が、その団体と著者との出会いを生んだ。そして、いずれの芸能団体についても、著者との出会いが、少なからず被災後の活動を再生していく力につながっていったのである。

もちろんそうした支援者との出会いを得るために、SNSを活用したり、あらゆるイベントに足を運んだり、他団体とのネットワークを構築したりして、アンテナを張り続けることはできる。しかし、とくに地域社会での閉鎖的な活動のなかで、さらに被災した状況下では、そうした出会いは少なからず偶然性に縛られてしまう難しいことであるように思う。助けを求める声は、かならず届くわけではない。このことは、支援団体と被災団体のマッチングにおいて、その仲介役となる中間支援者が必然的にすべての被災団体の声を拾いきれないがゆえに、一部の被災団体に支援が集中してしまう「支援格差」の問題とも重なる。本書では、著者の目に映ってきた数多くの民俗芸能の可能性の物語が描かれている。だからこそ、翻って、あまりにも広大な被災地の至るところにある、著者の目には映らなかった人々の存在、著者に会えなかった人々の可能性にも、想像を広げることができる。そうした思考が、本書が見据える、非常時のあとで、現実的な地平で民俗芸能を支えていく方法を模索する必要性を、なお一層強く感じさせるのではないだろうか。

東日本大震災からまもなく5年が経過し、被災地にいまなお残るさまざまな問題とは別のところで、そこに生きる人々の意識として「いつまで被災者でいけばいいのか」という思いが、確かに存在する。裏返せば、次々に湧きでてくる地域社会の問題を目の前にして、その地からの離れがたさに頭を悩ませ続ける支援者もまた「いつまで支援者でいけばいいのか」という思いを抱えているのかもしれない。たがいに、ひどく疲弊しているはずだ。支援には、人間同士の関わりあいである以上、時間的にも空間的にも、かならずキャパシティが存在する。被災者として「呼びかけ」続けることにも、支援者として「呼びかけ」られ続けることにも、限界がある。もう声をあげることに疲れてしまった人々の、あるいは声を届けることを諦めてしまった人々の、声なき声に耳を傾けようとする想像力は、いまなお被災者であり続ける人々／支援者であり続ける人々の双方を助けることであり、あらゆる支援をつなげ、広げていくときに欠かせないものであると考える。